

図書紹介

Ronald C. Nairn. *International Aid to Thailand, the New Colonialism?* New Haven and London: Yale University Press, 1966. vii + 229p.

著者は現在、アリゾナ州プレスコット大学学長であるが、軍事・外交研究の諸分野で東南アジアに20年以上にわたり関係、そのうちタイに5年間在住した東南アジア専門家である。

この東南アジアの経験をもととして、発展途上国にたいする外国援助のケース・スタディにタイをとりあげ、外国援助がはたして「新植民地主義」かどうかという課題に答えようとするのが本書である。

この大きな問題を対象としているが、実はその題目と問題と内容とは、ひじょうな違いがある。いうまでもなく、タイにたいする外国援助のなかで、きわだって大きいのはアメリカの援助である。ところが、これは本書では取り扱われていない。またかりに、ここでいう international aid を狭義に解して、国際機関による援助に限定しても、タイの経済開発に最も貢献している世界銀行 (IBRD) についても、ぜんぜん触れられていない。ここでとりあげられている国際機関はユネスコだけである。しかもユネスコはタイに対していろいろな援助活動を行ってきたが、そのうちで1951年から開始されたバンコク南方の Cha Cheong Sao における Educational Pilot Project と1953年から進められた東北タイのウドンにおかれた Thailand UNESCO Fundamental Education Center (TUFEC) の二つだけしかとりあげられていない。

しかし、この Cha Cheong Sao Project と TUFEC の2ケースの研究としては、その背景から実施状態、さらに成果に至るまで、きわめて綿密であり興味深い。

本書は3部からなり、第1部は二つのプロジェクトの機構を説明し、第2部ではこれにたいするタイ側の反応をとりあげ、第3部では末端へのプロジェクトの影響や浸透を検討している。もともと、Cha

Cheong Sao Project は教育方法の改善を、TUFEC は community development を主目的としたため、その目的は異なっている。しかし、著者は両プロジェクトとも成功をおさめなかったとする。その失敗原因として、派遣専門家がタイ語に不自由し、タイの社会環境への準備が不十分であったこと、手段や方法がタイのニーズに合致しなかったこと、国連の態度や方法が旧植民地宗主国とあまり異ならなかったことをはじめ、多くの点を指摘する。わたくしは、ほとんど全面的に著者の見解に同意する。

しかし、本書で触れられていないが、ひじょうに重要に思われる点は、約10年間ユネスコによって営まれたこの両プロジェクトがタイ政府に引き渡されたあと、まるで死んでしまったかのような状態におちいつている事実である。しかも、この状況にたいしタイ政府側はもちろん、ユネスコ側も何ら反省していないことである。プロジェクトが失敗であると批評し、その原因を指摘することはやさしい。だが、いぜんとしてその施設が残っている以上は、これをいかにして再生させるかが、重要なのではなからうか。著者がこの点についてほとんど触れていないことを残念に思う。

とはいうものの本書は、ユネスコの二つのプロジェクトのケース・スタディとして、すぐれた研究である。発展途上国にたいする外国援助のひとつの側面にかんする重要な文献となるであろう。

(本岡 武)

Shigeru Ishikawa. *Economic Development in Asian Perspective*. Tokyo: Kinokuniya, 1967. xix+488p.

本書は、一橋大学経済研究所の Economic Research Series No. 8 として、石川滋教授がアジア諸国をデータとして、まとめあげられた低開発国経済発展理論である。

著者はまず本書の背景として、つぎの3点を明示

する。第1に、現在の発展途上国の経済発展を規定する初期条件は、多くの点で現在の先進国のかつてのそれとは異なる。第2に、そのため発展途上国の経済発展は、先進国の経験にくらべて、より困難になっている。第3に、先進国の過去の経済発展の経験やそれにもとづく理論は、現在の発展途上国にはそのまま適用されえないことが多い。

本書は5章からなる。第1章は、とくに発展の初期条件と経済成長率を中心として、経済発展分析の一般理論を明らかにする。第2章は、農業発展のための基礎投資と戦略とをとりあつかう。これはわたくしにとってとくに興味深い農業開発理論である。ここでは、アジア農業の開発視点からの特質を明らかにしたうえで、とくに洪水防御、灌漑排水と施肥とを重視し、そしてプロジェクトの選択、あるいは資本調達など、生産基盤条件と生産改善条件とにまつわる諸問題を検討する。第3章では、農村部門における過剰労働力問題がとりあげられ、労働の増減、農民の行動パターン、過剰労働力の吸収など、ひじょうにおもしろい問題が提示されている。第4章では農業と工業との間における純資源流動関係を分析する。すなわち、経済発展過程においての、その流れの方向と大きさを明らかにする。そのひとつの示唆として、工業化は農業部門からかなりの大きさの資本の流入を必要とするという先進国についての従来の理論に疑問をなげかける。第5章は技術進歩と工業発展の二重構造と題して、工業部門の発展をとりあつかい、技術の選択は、工業種類の選択と同時になされるべきことを強調する。最後に統計データのリストがあげられる。きわめて丹念に集められ、著者の現実認識への意欲のほどがうかがわれる。

理論と現実とをふまえた低開発国経済発展にかんする研究として、本書は世界的にみて最高水準をゆくものだと思われる。著者の日ごろの研鑽と、この輝かしい成果とにたいし、心から敬意を表さなければならぬ。

もちろん、これだけの膨大な研究であり、またきわめてチャレンジングな内容であるだけに、いろいろと質問させてもらいたい点を感じる。そのうちのただひとつだけをあげさせていただくと、アジアの発展途上国は、台湾、韓国をのぞくと、大きくわけて、中国・東南アジア諸国（これには質的にセイロ

ンをいれてもよからう）・インド（これにパキスタンを加えよう）の三つになる。この間に、共通的な要素も決してないわけではないが、きわめて異質な要素が多いのではなかろうか。わたくしは昨秋ユネスコ国際諮問委員会に出席したとき、同じく開発途上国といわれているサハラ以南のアフリカ諸国と東南アジア諸国との相違のあまりにも大きいのに驚いた。これと同じことがこのアジアの3地域についてもいえないだろうか。この意味でも、経済開発理論のむずかしさを強く感じさせられるのである。

(本岡 武)

Daw Kyan. *Bingala:-thwa:-sadam*. Rangoon: Myanma-Naingan Thamaing:-Komaishin, 1963. 86p. (ドー・チャン編『ベンガル訪問記録文書』ビルマ国史委員会)

本書は、ビルマ国史委員会の報告書シリーズ No. 2 で、1830年にビルマ王国からベンガルへ派遣された外交使節団の往復旅行日誌（原本は貝多羅）を印刷製本したものである。

第一次英緬戦争直後の1826年2月24日に締結された「ヤンダボ条約」第6条に基づき、英国とビルマ王国は相互に駐在官を置くこととなり、英国からは Major Burney が1830年4月24日に王都アバに着任し、ビルマ王国側からはマハーシードゥーを首席代表とする84人の使節団が英国総督の居所ベンガルへ派遣された。

この一行の主な目的は、編者ドー・チャンの序文によれば、(1)カポー峡谷地帯のビルマ王国への返還、(2)ヤンダボ条約第4条に規定された境界線、サルウィン川の対岸にあるマルタバン地方の返還、(3)アラカンとテナセリム地方の返還、(4)駐在官の相互派遣を規定したヤンダボ条約第6条の撤廃、等を英国総督に要求することであった。

一行は1830年10月9日にアバを出発、イラワジ川をくぐって陸路アキャブへ出、そこから船でベンガルに向かった。1832年11月23日、アグラで総督と会見、翌33年9月21日にアバへ帰任した。

本書は、その往復の旅行日誌を日付順に編纂して本文 (pp.25-60) とし、さらに編者の序文 (pp.1-

24), 使節団長 マハーシードゥー (本名 ウー・シュエ) の解説 (pp.61-73), および 派遣に関連性をもつ7種の公式文書を補足追加した付録 (pp.75-86) とから成り立っている。

したがって、本書は第一次英緬戦争を境として大きく変動することになったビルマ王国の姿を、近代史・政治史の立場から解明する場合に、有益な一つの資料となり得る性格をそなえているといえよう。また、コンバウン王朝末期に欧州へ派遣されたキンウン・ミンヂーの「ロンドン訪問日誌」と「フランス訪問日誌」、ウー・チェインの「ポルトガル・スペイン・イタリー訪問日誌」に先立つ日誌文書の先駆的存在としても、その存在価値は大きいといえる。(大野 徹)

Tekkado-Pinnya-Padetha-Sazaung. vol. I, pt. 1~4 (1966), vol. II, pt. 1~2 (1967).
(大学統括局編『大学学術総合研究』ラングーン：大学統括局，1966，1967)

ビルマの学術研究誌は、従来各学部・各研究所ごとに編纂、発行されていたため、特殊な人を除いて一般に入手困難であった。また内容も特定の専攻分野のみに限られていた。日本で利用できるものとしても、わずかに *Journal of the Burma Research Society* や、*Bulletin of the Burma Historical Commission* 等があるにすぎなかった。

革命政府成立後、研究・教育の振興に力がそそがれ、1966年3月、はじめて全ビルマの大学、予科大学を網羅した総合学術研究誌が誕生した。これはビルマの教育・研究史上画期的なことと言えるだろう。現在は季刊誌として年4回発行されている。

本誌には次のような特徴がある。(1)収録された論文の内容が、自然科学・人文科学・社会科学等、あらゆる分野にわたっていること。(2)ビルマの全大学を包含していることから、執筆者の顔ぶれも、ラングーン、マンダレー両文理大学をはじめ、教育大、経済大、工大、農大、医大、畜産大、陸大、モールメン・ミッターナー両予科大等の教授、講師、助手、副手等多士済済であること。(3)収録論文のすべてが、ビルマ語で記述されていること。

第1巻第1号の序文にみられる文相フラハン大佐の言葉を借りるまでもなく、全論文がビルマ語で統一されていることは、「史上初めて」であるばかりでなく、民族主義に基づくこの国の教育体制が既に確固たるものになってきていることをうかがわしめる。高等教育機関における用語の問題は、1948年の独立と同時に一つの重要な課題であったが、その実現は想像以上に困難であった。文部次官ニーニー博士の説明 (vol. I, pt. 1 の巻頭文)によれば、ビルマ語が大学における教育用語として適用されるようになったのは、1966年11月頃からだという。

収録された論文の大半が研究対象をビルマに求めているため、ビルマ研究に従事している諸外国の学者にとってもその利用価値はきわめて大きく、これからは本誌の存在に無関心ではできないと思われる。全論文の内容を逐一紹介する余裕がないので、主なる論文名を参考までにとりあげてみると、ドー・エーミン「インダレー族の社会的慣習」、ウー・コーコマウン「コンバウン時代におけるビルマ経済史」、ウー・バシン「ベイタノウ城跡と史的解釈」、ドー・ティンミョウグウェ「ビルマの有用樹木」、ウー・ポウチョーミン「封建時代における長編小説の流れ」、マ・キンタン「インレー地方の漁具」、ウー・シュエトイン「シャン語に関する言語学的研究」、タントゥン博士「アバ時代の碑文にみられる史的資料」、ドー・インインミャ「ビルマにおける所得税制度の変遷」等は有益な示唆に富んでいる。

ただ難点を言えば、本書の収録論文が玉石混交だという点であろう。きわめてユニークな研究成果から、大学の講義録程度のものまで千差万別である。純粋な学術研究誌たらんことを願うのであれば、やはり専攻分野に寄与し得るような独創的な研究論文に焦点をしばるべきであろう。

ともあれ、ビルマ学界に一致団結した形の研究機関誌が誕生したことを喜ぶとともに、諸外国との学問的交流が今後盛んになることをこころから祈る次第である。

(大野 徹)

Direek Chaiyanaam. *Thai kab songkhramlook khrang thii 2*. Bangkok: Prae Pittaya, 1966. 1147 p.

本書の題名は、「タイ国と第二次世界大戦」の意味である。そして、著者の Direek は、32年革命以来、タイ政界で活躍を続けてきた文官政治家として著名である。外交官歴も長いので、国際的な知名度も高く、そのかれが、このような本を著わしたと知ったら、いちおうの関心を示すものは少なくないはずだ。

たいへんな力作である。大戦直前のタイの外交関係の説明にはじまり、戦争開始後タイの辿った親日化の過程、そして戦後の自由陣営との接近の過程が、こと細かく解説されている。あえて「分析」とはいうまい。事実の羅列は、タイ人特有の *dillettantism* 好みがなくなる限り、どうにもなおらないだろうから。しかし、あわせて1000ページ以上に及ぶ2巻本に、戦争当時のタイが辿った公式外交路線の解説と関係資料がぎっしりと収められているのだから、有益でないはずがない。

本書が無味乾燥な公式記録集纂に堕さなかった理由は、著者自身にとって、戦争当時および戦後のある時期が、ある種の感慨をもって思い起こされる時期だからである。政治家としての Direek が、もっとも華やかな脚光を浴びたのはその頃ではなかったか。従って、本書のある面は、Direek 自身の回顧録でもあるわけだ。かれが1947年2月に Thamrong 内閣を辞任した理由については、当時いろいろ憶測がなされたが、本書において、かれは当時のことをくどく回顧し、理由づけを試みたりしている (pp. 679~708)。だからかれの自叙伝風な個所は、政治史の資料として貴重である。

この本のような力作が、タイ人の手によってどんどん書かれるようになると、タイ研究はもっとおもしろくなることだろう。ふつう、タイの現代政治史研究に役に立つ本としては、匿名のジャーナリストのあやしげな政治論か、さもなくば政府の刊行する公式文書か、そのいずれかしかない。実際政治に関与した政治家は、めったに文章を書かない。この本はその点貴重な例外なのである。

本書全体が貴重な資料の宝庫であるが、なかでも、ふんだんに引用されてあるたくさんの手記や文書の

なかには、ふつう入手できないものもあって (たとえば, pp. 341~474 に引用されてある、戦時中のタイ国内事情を描いた3人の政治家の手記)、この上なくありがたい。

もっとも、いうまでもなく、これも欠点のない本ではない。この本だけで、第二次大戦前後のタイのすべてがわかるとは考えられない。派閥政治を特徴とするタイでは、1人の政治家が知りうる事実は限られている。それに、著者自身、その間駐日大使や駐英大使をしたりして、限られた経験しかもてなかった事実も考えねばならない。また、人間心理や動機が描けていない点に大きな不満が残る。しかし、文句はいうまい。とにかく得難い貴重な本なのだから。

(矢野 暢)

Gordon Young. *Tracts of an Intruder*. London: Souvenir Press, 1967. 191 p. + 12 photographs.

ここで言う“an intruder”とは、著者自身のことを言う。「自然につけられた跡で、生き物が残した跡に対し、人間が残して行った足跡やナイフのキズは“intruder”の跡である。」と言う意味の Lahu-na 語の歌から取られたものである。題名からも分かるように、本書は学問的な研究書ではないけれども、著者の北タイの山地民 (主として Lahu 族) との生活が生き生きと描かれていて、非常に興味深い本である。著者はその“Hill Tribes of Northern Thailand”により日本の研究者にも広く名を知られているが、本書は前者とは趣を異にし、北タイの山岳地帯でラフ族の友人とともに行った狩猟旅行に関する九つの話から成る。したがって、文化人類学や言語学の本ではないが、それだけに山地民の性格、移動、村の様子などが、単なる研究者としてではなく、彼らの仲間の1人として、生き生きと描き出されている。すでに知られているが、著者は中国雲南省の Lahu-na 族の村で生まれ、英語よりも Lahu-na 語を先に覚えるほど山地民と密接な生活を送り、ビルマ、アッサム、インド、ヒマラヤを経て、現在は北タイのチェンマイに住み、USOM の山岳民族のエキスパートとして働いている。考えて

みれば、雲南、ビルマ、タイ国北部という著者の歩いてきたコースは、現在の北タイの山地民のほとんどがたどってきたコースと同じだと言える。

現代タイ国では、本当に山地民の生活や性格を残している山地民を探すのは車で行ける所ではもう不可能になりつつあると思われるが、本書に描かれた山地民の村は、すべて徒歩で何日もかかる所ばかりで、まだ平地民の影響を受けて生気をぬかれていない Lahu-na 族、Lahu-nyi 族等が対象になっている。

最後の1章、Beyond the Spirit Gates はアカ族の村に関するものであるが、これも現代のようにわれわれになじみ深いものとなる以前のアカ族を描いたものである。わたくしはアカ族の村に家を建てて住んだことがあるが、本書に描かれているような村へ行くには、わたくしのいた村から3泊4日もかけて歩かなければならなかった。本書が扱っている地域は、北タイの主なる山岳地帯をほとんど全部カバーしている。Lahu-na 族の他に、Lahu-nyi, Lahu-shi, Aka, KMT の兵隊、アヘンの密売団などの動き、動物の分布等が描かれていて、たいへん興味深い本である。

(桂満希郎)

Khanakammakaan chamra prawatsaat thai Khanakammakaan catphim eekasaan thaang prawatsaat watthanatham lae booraannakhadii. *Thalaeng ngaan prawatsaat eekasaan boorannakhadii*, Vol. I, No. 1 & 2. Bangkok, 1967.

1963年に設立されたタイ国歴史(chamra)委員会の研究発表機関であり、4カ月に1回の出版物である。現在、上記の2冊のみが出ている。本書は単行本ではないので、この図書紹介に取り上げるにふさわしいかどうか疑問であるが、同委員会にはタイ国における歴史・考古学の代表的な人達はほとんどすべて含まれており、現在の研究の動向を知るうえで重要な出版物の一つにかぞえられるので、いま出ている最初の2冊のみを紹介しておく。報告の類は別にすると、第1号には五つ、第2号には六つの論文が発

表されているが、そのうちで1号2号にわたって続くものは、(1)スパタラディット・ディッサクン：13世紀以前の東南アジアの状態について、(2)ローン・サヤーマーン：アユタヤ史、(3)セーンソーム・カセームシー：ラタナコーシン史である。ここでは、この三つを取り上げるにとどめておく。(1)は第1号において地理および風土に関する説明の後、この地域の先史時代の住民に関する論述、ついでインド文化の伝来とフーナンおよびタワラワディーまでを一気に説明し、第2号に入ってマレー半島およびインドネシア群島の西暦前より8世紀に至るまでの状態を説明したものであるが、本論文は未だ完結していない。(2)は第1号でいちおうアユタヤ王朝の変遷を記したのち、第2号では統治、社会および経済を論じており、当時の官僚制度や法律等がかなり詳しく述べられているが、色々な本からひろい集めてそれを並べなおしただけという感じがする。(3)も同様で、これといって新しいものはなく、文献を整理し直したもので、文字通り chamra という感じであるが、第2号のビルマ対タイの多数の戦争の記録は非常におもしろい。これらの論文の他にも、最近の調査の記録や碑文に関する研究発表などがあり、タイ国におけるタイ人の研究活動を知る上で重要な書物と言わねばならない。念のため、次の通り第1号と2号との目録をあげておく。

第1号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa : まえがき
- (2) Phraya Anumaan Raachathon : 歴史および考古学について
- (3) M. C. Suphattharadit Ditsakun : 13世紀以前の東南アジアの状態について
- (4) Chanthit Krasaesin : 第4回委員会記録
- (5) Tri Amaattayakun : スコータイ王朝の古都調査
- (6) Roong Sayaamanon : アユタヤ史
- (7) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii : ラタナコーシン史
- (8) Chanthit Krasaesin : 歴史(chamra)委員会設立について
- (9) Prasoet na Nakhoon : スコータイ時代の町の位置決定の方法について
- (10) Wilaatwong Noppharat : ムアング・ウー

みれば、雲南、ビルマ、タイ国北部という著者の歩いてきたコースは、現在の北タイの山地民のほとんどがたどってきたコースと同じだと言える。

現代タイ国では、本当に山地民の生活や性格を残している山地民を探すのは車で行ける所ではもう不可能になりつつあると思われるが、本書に描かれた山地民の村は、すべて徒歩で何日もかかる所ばかりで、まだ平地民の影響を受けて生気をぬかれていない Lahu-na 族、Lahu-nyi 族等が対象になっている。

最後の1章、Beyond the Spirit Gates はアカ族の村に関するものであるが、これも現代のようにわれわれになじみ深いものとなる以前のアカ族を描いたものである。わたくしはアカ族の村に家を建てて住んだことがあるが、本書に描かれているような村へ行くには、わたくしのいた村から3泊4日もかけて歩かなければならなかった。本書が扱っている地域は、北タイの主なる山岳地帯をほとんど全部カバーしている。Lahu-na 族の他に、Lahu-nyi, Lahu-shi, Aka, KMT の兵隊、アヘンの密売団などの動き、動物の分布等が描かれていて、たいへん興味深い本である。

(桂満希郎)

Khanakammakaan chamra prawatsaat thai Khanakammakaan catphim eekasaan thaang prawatsaat watthanatham lae booraannakhadii. *Thalaeng ngaan prawatsaat eekasaan boorannakhadii*, Vol. I, No. 1 & 2. Bangkok, 1967.

1963年に設立されたタイ国歴史(chamra)委員会の研究発表機関であり、4カ月に1回の出版物である。現在、上記の2冊のみが出ている。本書は単行本ではないので、この図書紹介に取り上げるにふさわしいかどうか疑問であるが、同委員会にはタイ国における歴史・考古学の代表的な人達はほとんどすべて含まれており、現在の研究の動向を知るうえで重要な出版物の一つにかぞえられるので、いま出ている最初の2冊のみを紹介しておく。報告の類は別にすると、第1号には五つ、第2号には六つの論文が発

表されているが、そのうちで1号2号にわたって続くものは、(1)スパタラディット・ディッサクン：13世紀以前の東南アジアの状態について、(2)ローン・サヤーマーン：アユタヤ史、(3)セーンソーム・カセームシー：ラタナコーシン史である。ここでは、この三つを取り上げるにとどめておく。(1)は第1号において地理および風土に関する説明の後、この地域の先史時代の住民に関する論述、ついでインド文化の伝来とフーナンおよびタワラーワディーまでを一気に説明し、第2号に入ってマレー半島およびインドネシア群島の西暦前より8世紀に至るまでの状態を説明したものであるが、本論文は未だ完結していない。(2)は第1号でいちおうアユタヤ王朝の変遷を記したのち、第2号では統治、社会および経済を論じており、当時の官僚制度や法律等がかなり詳しく述べられているが、色々な本からひろい集めてそれを並べなおしただけという感じがする。(3)も同様で、これといって新しいものはなく、文献を整理し直したもので、文字通り chamra という感じであるが、第2号のビルマ対タイの多数の戦争の記録は非常におもしろい。これらの論文の他にも、最近の調査の記録や碑文に関する研究発表などがあり、タイ国におけるタイ人の研究活動を知る上で重要な書物と言わねばならない。念のため、次の通り第1号と2号との目録をあげておく。

第1号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa : まえがき
- (2) Phraya Anumaan Raachathon : 歴史および考古学について
- (3) M. C. Suphattharadit Ditsakun : 13世紀以前の東南アジアの状態について
- (4) Chanthit Krasaesin : 第4回委員会記録
- (5) Tri Amaattayakun : スコータイ王朝の古都調査
- (6) Roong Sayaamanon : アユタヤ史
- (7) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii : ラタナコーシン史
- (8) Chanthit Krasaesin : 歴史(chamra)委員会設立について
- (9) Prasoet na Nakhoon : スコータイ時代の町の位置決定の方法について
- (10) Wilaatwong Noppharat : ムアング・ウー

トーンの記録

(11) 編集局：あとがき

第2号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa : 総理大臣の公務遂行について
- (2) M. C. Suphattharadit Ditsakun : 13世紀以前の東南アジアの状態について
- (3) Prasoet na Nakhon : スコータイ 碑文研究報告
- (4) Khacoon Sukkhaphaanit : タイ史におけるヤソートンおよびアンコールトムについて
- (5) Roong Sayaamanon : アユタヤ史
- (6) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii : ラタナコーシン史
- (7) Chanthit Krasaesin : Ngoen Kham Pawm について
- (8) Trii Amaattayakun : ピチットにおける都跡調査
- (9) Chanthit Krasaesin : あとがき

(桂満希郎)

Kulaap Manlikamaat. *Khati chaoban*. Bangkok: Samakhom phaasaa lae nangsuu haeng prathet thai, B. E. 2509 (1966). v + 4 + 268 p.

Samakhom phaasaa lae nangsuu haeng prathet thai は国際 PEN クラブのタイ国支部であるうえに、1958年に設立されて以来、タイ語・タイ文学に関して出版・会合等をはじめとして様々な活動が続けてきているが、その他にも土着文芸 (wannakam doem) の研究をも目的としており、本書はその方面における研究成果として現われたもので、題名の *Khati chaoban* というのは “folklore” のタイ語訳に当てられている。全体は二つの部分にわかれ、第1部は *Khati chaoban* (folklore)、第2部は *nithan chaoban* (folktale) となっており、両者とも北は Chiang Rai から南は Nakhon Si Thammarat にいたるまでの各地域で著者自身が記録収集したものを集めている。

第1部では、folklore なるものの概念をヨーロ

ッパおよびアメリカで発達した方法論にもとづいて規定し、全部で13種類に分類し、それぞれの例が集められている。しかし、最初の説明の部分がやや不十分で、何にもとづいて本書の13種に分類したのかという点をはっきりしていないきらいがある。これに対して、第2部の folktale においては、その分類方法をかなり詳しく説明しているのだから、第1部よりずっと明瞭である。最初に地域による分類、形 (form) による分類、ついで Antti Aarne による Type Index および、Aarne-Thomson Types of Folktale について、その type index の例をあげながら説明する。最後に最も詳細な方法として Thompson による Motif Index of Folk Literature を説明し、その index の一部を例としてあげている。さらに実際に field で取材する場合の技術的方法を簡単にではあるがつけ加えていて、よくまとまったものとなっている。しかし、本書に集められた folktale の分類に用いられている方法は、index 方法ではなくて、形 (form) による分類である。これは本書に集められた folktale が合計38というあまり大きくない数を考えれば、もっともなことかもしれない。本書は folklore そのもの、あるいはその方法論を論じた研究書ではなく、各地で集めたものを一定の基準にもとづいて分類整理して提出した資料集と見るべきものである。

タイの folktale を集めた本は今までもかなり出ているが、主として地域別に収集したもので、内容的に見ると地名伝説から仏教本生譚に由来するものに至るまで雑然と1冊にまとめただけで、これといった明確な基準にしたがって分類整理したものは本書がはじめてではなかろうか。タイ国における folklore-folktale も地域によってはやがて間もなく消え去ろうとしているものもたくさんあるにちがいないが、また一方こういったものはいくら集めてもつきることのないものであるから、本書によって示されたような一定の方法で収集、分類、整理され記録されてゆくことが望まれる。この意味で、本書はその量はあまり多くないが、一つの手本、あるいは出発点となるものではなかろうか。

(桂満希郎)